

# 奢侈と節約

— イザック・ド・ピントの奢侈批判を中心に —

米 田 昇 平

## 序

フォルボネは（奢侈的）消費欲求の経済的機能を一般化し、文明社会を相互的欲求の体系とみるマンデヴィルとムロンの構想を発展させたが<sup>(1)</sup>、このような消費欲求・消費支出の意義を一意的に強調する論理は、ヒューム、イザック・ド・ピント（Isaac de Pinto, 1717-87）、チュルゴ等による節約の論理によって批判を浴びることになる。かれらはレベルの差はあれ、インダストリーを持続的に維持するためにはむしろ制欲による「節約」こそが求められねばならないと考えた。これにより奢侈的欲求の是非をめぐる奢侈論争に重要な転回が印され、経済学の形成の部面に新たな道筋が刻まれることになる。

本稿の目的はおもにオランダのユダヤ人エコノミスト、イザック・ド・ピントの奢侈批判の検討を通じて、この転回の一局面を浮き彫りにすることである。ピントは今日では、マルクスがわずかに言及し、アンリ・セーやとりわけゾンバルトがピントの『流通・信用論』（*Traité de la Circulation et du Credit*, 1771）における証券論や投機理論を高く評価したことなどによってわずかにその名が知られているにすぎないが<sup>(2)</sup>、同時代の人々には長く『奢侈論』（*Essai sur le Luxe*, 1762）の著者として知られていた<sup>(3)</sup>。本稿ではこの二つの著書によりながら、流通・信用論の概要によって彼の

経済ビジョンの骨格を捉え、それとのかかわりにおいて彼の奢侈批判の特質を明らかにしたい<sup>(4)</sup>。

(注) (1) フォルボネに関しては、筆者の前稿「フォルボネにおける奢侈と消費」『下関市立大学論集』第39巻、第1号(1995年5月)をみよ。

(2) ピントの略歴(とりわけヒュームとの関係)や『流通・信用論』がゾンバルトなどによりどのように評価されたかなどについては、R. H. Popkin, "Hume and Isaac de Pinto", *Texas Studies in Literature and Language*, vol. VII (1970) と "Hume and Isaac de Pinto, II. Five New Letters", in W. B. Todd ed., *Hume and the Enlightenment* (Edinburgh, 1974) にやや詳しく紹介されている。ポップキン氏にはこのほか "Isaac de Pinto's criticism of Mandeville and Hume on luxury", *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, vol. CLIV, 1976 がある。ただし、いずれも理論的分析に関しては平板の印象を拭い難い。

(3) Popkin, "Isaac de Pinto's criticism of Mandeville and Hume on luxury", p.1712.

(4) 『流通・信用論』はバリ滞在中の1761年から1764年にかけて執筆された諸論説から成っている(ただし出版までにかかなり書き加えられたと思われる)。構成をごく簡単に記せば、『流通・信用論』の本体は四部からなり、第一部(執筆は1761年, pp. 30-97)と第二部(執筆は1763年, pp. 98-128)で公債擁護論(国家財政論), 第三部(pp. 129-181)と第四部(pp. 182-226, ともに執筆は1763年から1764年)でおもにミラボー批判(土地単一税批判など)が展開される。このほかに「奢侈論」(*Essai sur le Luxe*, 1762, pp. 321-342), 「交易上の嫉妬に関する書簡」(*Lettre sur la Jalousie du commerce*, pp. 227-288)などの諸論説が合冊されている。ここでは『奢侈論』はこの合冊されたテキストを用いている。

## 1. ピントの流通・信用論

ピントは経済社会を流通論的視点から捉える。インダストリーを維持し導くのは貨幣の順調な流通(循環)であり、これを維持し促進するのは堅固に維持された信用システムである。アメリカの発見は大量の貴金属をヨー

ロッパにもたらし、貴金属の価値を低下させたが（物価騰貴）、しかし同時にこの貴金属の増大と新世界への販路の拡大によりヨーロッパの流通とインダストリーは増大し、貨幣需要は金属貨幣だけでは対応しえないほどに増大したとみる。国際間での資金調達（国際金融）を含めて、紙券信用や公債（公的証券）による信用システムが金属貨幣の流通を補完するものとして求められたのも、このためである（p. 54）<sup>(1) (2)</sup>。したがって信用システムが機能不全に陥れば、流通とインダストリーの機能も大きく損なわれるであろう。この意味で「流通と信用はその機能がいまだ十分には知られざる二つのバネである」（p. 135）。この流通の根幹をなすのは主権者（政府）と臣民との循環（cercle）であり（pp. 136-7）、流通の機能はおもに政府がどのように臣民から税を集めこれを支出するかに依存する。「もし地表全体に2, 30滴の水をたらしたとすれば、このごくわずかの水の散布はあつというまにかれてしまい、なにも肥沃にせず、だれの喉もいやさないであろうが、しかしこの2, 30滴のすべてがじょうごで受け取られるならば、一つにまとめられて、それらの水はもっとも生き生きとした動きを可能にする流れを作るであろう、人々を集め結び付ける中心がなければならぬ。…税の総額がそれぞれの中心において確実に受けとられることによりインダストリーの利益となるように税が公共へ波及することから生じる利益と進歩は、容易に理解されよう」（p. 52）<sup>(3)</sup>。こうして「政治科学全体においてもっとも重要なことは財政についての認識である、なぜなら国家全体の力と調和が依存しているのは財政だからである」（pp. 138-9）。ミラボーが想定するような純粋の農業国はもはや（ポーランド以外には）存在せず、富の総体は「商業、漁業、奢侈、信用証券、公債、あらゆるジャンルで増加した製造業、人工的富」などにより構成されるが、この新たな「一般的システム」が円滑に機能するかどうかは、まさに国家の財政・信用政策にかかっているのである（p. 138）。

彼はおもに公債の問題に焦点を絞り、以上の観点に立って公債批判に反論する。ピントが整理する批判点は次の四つである、1. 国家債務の増大

は利子支払いのために国民に重税を課すことになる、2. このための増税は労働の価格を高めるから製造業に有害である、3. 外国の債権者に貢租を支払うことになる、4. 公債は国民に怠惰の精神と投機的売買をもたらす (pp. 42-3)。これに対しピントはこれらの弊害は例外的にすぎないとして順次、反論を加えていく。

彼は債権者が利子の請求権しか持たないイギリスの永久公債を例にとり、利子支払いのためのわずかな税収を担保して発行される公債はむしろ通貨を増加し、しかも「税は大部分出ていく手に戻り、それがイングストリーを害する以上にそれを促進する」と考える (p. 43)。たとえば、1760年に政府が借り入れた1200万ポンドは外国の債権者へ支払われるごく一部を除いて大部分が国民の間を流通し、一方では額面総額1200万ポンドの利子付き債券が流通するから通貨の量は二倍になるとする。「同じ1エキュが1日で20人の異なる手を流通し、続けざま20回もシーニュの通貨価値を表わす」ことを考えれば、その流通効果はきわめて大きい (p. 49)。この流通により、「政府はかれらを豊かにしたこの同じ政府に逆に貸し付けることのできる…大勢の人々をかならずや見出すに違いない」(p. 45) から、これにより次の年には政府は新たな借り入れが可能となる。債務が債務を可能にする。こうして今日、総額約1億3千万ポンドもの巨額の債券が通貨として流通するに至っている。公債の発行のみがこのような事態を可能にすることは明らかである。「巨額の国家の債務は同時に存在するのではけってなかった、信用と流通の不思議な力が同じ貨幣によって継続的にこうした富の総量を生み出した」(p. 47) のである。

他方で、年400万ポンドの税を利子として受け取る債権者の支出は数倍の乗数効果を発揮し、「少なくとも流通に1500万ポンドないし2000万ポンドを生み出し、イングストリーのために支出される」から、「金持ちが支出するラントにより、多くの下層の人々は同じ貨幣によってそれほど大きくはないほかの支出を行うことができるようになるのはだれの目にも明らかである。したがって100万のラントが廃止されれば、その分の流通が何

度も除かれ、下層の人々の担税能力は1年で20分の1に減少してしまうであろう」(p. 53)。このように彼は政府と国民（勤労大衆）との流通（循環）の媒介者として、公債所有者の存在意義を高く評価する。債権者への利子の支払いは所得の移転にすぎず、この移転された所得はインダストリーのために用いられるから分配の不平等が国民全体の利益を損なうことはない、しかも公債の所有は貴族や地主だけでなく、「卸商人、小売商人、職人」など国家のあらゆる階層に及んでおり<sup>(4)</sup>、勤労に無縁な純然たる金利生活者などごく少数にすぎない<sup>(5)</sup>。したがって、利子の取得は愛国心を損なうどころかそれを維持しうる、これにより国民の多くが「自国の存続に関心を持つより強い理由」が生じるからである (p. 40)。こうして、この三者間での流通（循環）は機能的なものであり、かならずしも階層的に分断されているわけではなかった<sup>(6)</sup>。

第二の批判には、労働や一次的必需品の高価はおもにはアメリカの発見がもたらした大量の貴金属の流入と商業の拡大による「大量の消費の必然的結果」であり、税が高価の原因となりうるにしても、「税もまた富裕、安楽、自由の結果であるから、税のダメージはほかの有利によって十分に埋め合わせられる」(p. 62) とする。第三と第四の批判には、外国人からの資金調達と投機売買によって不都合を上回る有利が得られると応じる。投機的動機は公債や株式の購入に人を向かわせるインセンティブであり、これにより初めて国民は自己の遊休資金を国家の資金調達のために提供するのである。「時期をみて債券を売却し、この同じ債券からプレミアムを与えかつ受け取る容易さが大勢の人々を自己の資金の投資に向かわせるのである、これらの有利がなければかれらは投資をしないであろう」。この意味で「相場師 (agioteurs) は機構を動かすてこであることは明らかである。かれらがいなければ流通は機能しえないし、株式投機がなければ政府はこれほど巨額の借入をすることは決してできないであろう。株式投機家 (actionistes) が駆り立てる一般的な投機欲が借入の容易さを大いに助長するのである」(pp. 63-4)。外国人による公債の購入と投機売買は必

要な「補助」であり、経済全体の円滑な機能に必要な「わずかな追加」である。したがって、「もし株式投機や外国人がそれに貢献し、それを手に入れるのに必要でさえあるならば、それらを奨励してしすぎることはないであろう」(p. 67)。ここで彼が公債の存在意義の一つを投資誘因に求めていることは注目に値する。公債という利殖の誘因が存在するおかげで「だれももはや昔のように頑丈な金庫に貨幣をため込むことをしない」から、貨幣は残らず流通する。利得を公債に（再）投資する吝嗇家は「節約家と同様に後世のために種を蒔くことでみずからの財産を流通させ、公信用や債券や紙券を維持する」から国家に有益である。これに対し、過度の奢侈により利得を費消する浪費家は、その支出によって一時的に流通とインダストリーに寄与するにすぎず、いわば「木を幹から切り倒してしまう」。この意味で過度の奢侈は政府と勤労大衆との流通を損なうものにほかならなかった (pp73-4)。

このように国家債務は国家の必要を満たすばかりでなく、国民から遊休資金を残らず吸い上げかつ還流させることで流通を維持するきわめて有効な一手段であった<sup>(7)</sup>。しかし有効ではあってもそこに限度があることは明らかである。1. 税はどこまで利子負担に耐えうるか、2. 紙券信用は貨幣量と比例的にどこまで流通可能であるか、この二つが国家債務の上限を設定する。彼はイギリスを例にとって、前者に関しては利子支払いのための財源は十分にあるから問題はないとし、後者に関しては「公債は実現された錬金術であるが、るつぽを壊してはいけない。なんにでも限界があり…」としながら、この限界がどこまでかは定め難いとし、わずかにインドとの貿易においてバランスが順調であり、アメリカへの製品の輸出が増大し、人口と農業が維持されているかぎり公債発行の余地はまだ十分であると述べているにすぎない (pp. 68-72)。しかし一方で彼は戦時における公債の不可避的な膨張に備えるために、平時にそれをできるだけ償還しておくべきであると力説する。そのための有効な手段が減債基金であった<sup>(8)</sup>。

以上が「まったく新しい」と評価されたと彼のいう公債論の概要である<sup>(9)</sup>。彼はこのような流通（循環）論的視点を、さらに消費の側面から捉え直し肉付けている。ここで彼が重視するのは大衆的消費である。ルイ14世の治政以来のフランスの衰退の原因を税制の欠陥による人口の減少に求める議論に対し、彼は人口減少のおもな原因は幾度かの長い戦争、海運、航海、植民地、ナントの勅令の廃止、不寛容、大勢の聖職者、過度の奢侈などであり（なかでも戦争とナントの勅令の廃止が重視される）、これらによる人口減少とくに下層の人々の減少によって大衆的消費が減少したことが衰退の真の原因であるとする。彼はいう、「鑄貨の流通はそれが下層の人々を経由するほどより迅速となる。国庫を増やすのは細民の大きいなる消費である。この消費の総量はフランスにおいて戦争と不寛容により減少してしまった」(p. 184)。貨幣の流通と大衆的消費とを結び付けるこのような着想はボワギルベールから引き継いだものである<sup>(10)</sup>。彼は第四部で「最近入手した非常に興味深いまた非常に珍しいある著書」を、すなわちボワギルベールの『フランス詳論』（1695年）を21ページにわたって詳細に論評している(pp. 186-207)<sup>(11)</sup>。ピントにとっても「消費と所得は同じことであり、消費の破滅は所得の破滅」である、消費性向の高い大衆の消費こそが貨幣の流通速度を速め、流通や消費循環を維持する原動力であった。「より大勢の消費者がより大規模な流通を引き起こし、より大規模な流通は国家のあらゆる富を活性化させ新たな価値を生み出す」(p. 184)のである。

以上の諸論点を踏まえて、重農主義批判が展開される。批判の直接の対象はミラボアの『租税の理論』（1760年）とミラボアとケネーの『農業哲学』（1763年）である。すでに述べたように、ミラボアが想定するような純粹の農業国はもはや存在しないから、「土地生産物を富の唯一の源泉とみるこの原理は…絶対に間違っている」(p. 152)。彼は土地の富のほかにミラボアがそのいくつかを見逃した10ものジャンルの富を数え上げているが、その第一の富である土地の富にしても、「消費が欠乏するとき」

には有効に利用されえない。したがって農業を支えるのは「貿易商人、製造業者、金利生活者、大領主、奢侈品の職人たち」による流通と消費にほかならない (p. 214)。そもそも「一国の調和は多くの諸部分の釣合に依存している。それらはすべてお互いに支えあっている。一部分だけを保護し、ほかの部分を排除することは国家を解体させることである」(p. 217)。さらには「ミラボー氏のように、信用と流通が…あらゆる個人にもたらず継続的な享受が現実的であることを否定するのは、…パンと水以外の富は存在せず、そのほかのものはすべて慣習と世評に基づく不必要な贅沢品であると主張することである」(p. 163)。政治の目的は大勢の人口に生活資料を与えるだけでなくかれらを「安楽」に維持することにあるが、このためには農業以外の仕事に従事するさまざまな階層の人々が必要なのである (p. 225)。ボワギルベールの経済的相互依存の認識を踏まえつつ<sup>(12)</sup>、このように彼はフォルボネと同じ二つの論拠によって重農主義の農業偏重を批判するのである<sup>(13)</sup>。

(注) (1) 彼にとって、流通手段の機能に関して紙券信用や公債は金属貨幣と何ら異なるものではない (p. 149)。

(2) アメリカの発見により貨幣の必要流通量はむしろ増大したとするこのような認識がピントの議論の出発点であり、また流通と信用の意義に否定的なヒュームに対するピントの批判の要点でもある。彼は「ヒューム氏は金銀の豊富さがいわば必然的にした多くの事物を代表するために、これらのシーニュが必要になったことに関心を払わなかった」とし、さらに「われわれの習俗を改め、時代を 20 世紀あともどりさせ、人間を原始的な状態に戻し、必要となったわれわれの人工的な欲求を消滅させ、みんな哲学者となり、ディオゲネスとともに手のひらで飲むために粘土の壺を投げ捨て、貧しく有徳となろう、そうすればヒューム氏の諸原理が生きるだろう」(p. 124)と痛烈に皮肉っている。

(3) 彼は政府支出に関して具体的には軍事支出のほかに公職者への給与の支払いと公債所有者への利子支払いなどをあげるにすぎず、政府支出による積極的な何らかの有効需要の創出が明示的に論じられているわけではない。彼は「フランスにおいて君主に支払われる何百万ポンドもの貨幣はすべて再び国民のなかに注ぎ込まれる」(p. 50)と述べるにとどまっている。



(4) この点で、ピントは公債所有者のことを「蜜蜂の蜜を貪り食うもんすずめ蜂、農耕や土地の所有者に敵対する連中」などと中傷するのは間違っていると反論する (p. 39)。

(5) 彼はミラボーとケネーの『農業哲学』における金利生活者への批判（「金利生活者は貪欲な狼である」）に対し、利子付き貸付けはインダストリーに有利であり、また金利生活者は人々の労働によってその無為を養われる者ではなく、むしろその支出により人々を養うと述べた上で、勤労に無縁でまったく無為な金利生活者など今ではきわめて稀でしかないと反論している (p. 213)。

(6) スミスの『国富論』第5編第3章での公債批判は、一つにはピントの公債擁護論に向けられたものであると考えられている。そこでスミスは税金を担保してそれを公債所有者への利子支払いに当てることは、資本として機能したはずの収入を不生産的に消費してしまうことであるとして、この「ある著者」を批判している（大河内一男監訳『国富論』、中央公論社、401-2 ページ）。しかしピントは国民各層を含む公債所有者の支出はかならずしも不生産的な消費に当てられるとは考えていない。そして、上の引用文にも示唆されているように、たとえスミスのいう意味での不生産的な支出であっても能力を越えるほどの過度に及ばないかぎり、それは持続的に消費需要を与えることでインダストリーの誘因となると考える（ただし次節にみるように彼にとって不生産的な消費の意義は積極的なものではない）。公債所有者の利得は直接、間接に「インダストリーのために支出される」のである。彼にとっては、なにより国民の遊休資金を残らず吸収しうる政府と国民とのこの流通の経路こそは経済全体の流通の要であり、この経路なくしてインダストリーの維持はありえなかった。

(7) これについてわれわれは次のような事情を考慮すべきである。「健全な銀行制度が成長する以前には、公債はほかでほとんど見出しえなかった（投資上の）便益を提供したに違いないのである」（E. L. Hargreaves, *The National Debt*, 1930, 一ノ瀬篤ほか訳『イギリス国債史』新評論, 1987年, 92 ページ）。

(8) 彼は第二部「イギリスの減債基金を増やし、国債の一部を弁済する新たな手段」で、これについて詳論し、国債の一部を終身年金に転換することなどを求めている。

(9) ピントによれば、1761年にパリに滞在中に執筆された第一部の手稿は数多くコピーされ流布した。彼は「学識豊かなイギリス人たちはパリで私に私の学説はまったく新しいと言ってくれた」と自信たっぷりに述べている (p. VIII)。また彼はパリで知遇を得たヒュームに「交易上の嫉妬に関する書簡」とともに

それをみせたところ（1764年）、ヒュームはそれらの論説に「大いに満足した」と述べている。そして「私はヒューム氏が…流通と公信用に関する彼の考えのいくつかを修正するであろうと思う」と言明している（p. 122）。ヒュームの公債へのスタンスが1770年版の『政治論集』において大きく変化した事情は、竹本洋氏によって詳細に明らかにされているが、この変化にピントの論説がかわりえたかどうかは不明である（竹本洋「D・ヒュームの『政治論集』に関する試論(1)(2)」『大阪経大論集』第196号、第197号、1990年を参照）。

(10) 大衆の消費への着目それ自体は、1762年に出版された『奢侈論』にもみられるが、そこではこの観点が貨幣流通と結び付けられてはいない。

(11) ピントは『フランス詳論』を、ミラボーの『租税の理論』などこれまでに現われた財政論のあらゆる内容を含む優れた著作であるが、すべての富や所得を土地生産物や土地所得に還元している点で、またときとして常軌を逸した誇張や不正確な推論に満ちている点で批判を免れないと論評している。前者の批判点はいうまでもなく彼の重農主義批判と同じ線上にあり、彼は土地生産物以外の富を列挙しつつ、さらに「オランダやスイスでは不毛な土地がインダストリーや住民の所得を増加した」として土地所得のみが勤労所得を規定するものではないことを指摘し、後者に関してはたとえば「彼はマント徴税区やノルマンディー地方で彼がみたことに基づいて王国全土を判断してしまった」と、フォルボネが挙げたのと同じ難点を指摘しつつ、その行き過ぎた誇張や推論の不正確さを惜んでいる。その上で「この著書にはそれらを正当な価値に置き直せば、見事で十分なことがいくつもある」、なかでも流通に関しては「それは私がこの問題に関して正当な観念を見出した唯一の著書であるといわざるをえない」ときわめて高く評価する。所得と消費は同じことであり消費の破滅は所得の破滅であること、したがって国内における流通の自由や穀物輸出の自由を認めるべきこと、1エキュは消費性向の高い大衆の手にあるときにはその何倍も更新されること（流通速度の観点）など、「彼は流通、消費、国家のあらゆる階層の利益の連鎖と調和に関して数々の抽象的な真実をみた」のである。なおピントが読んだのは1712年のブリュッセル版である。

(12) ピントは「交易上の嫉妬に関する書簡」において、『フランス詳論』の一節を引用しながら、国内での経済的相互依存を直接に国際的な相互依存へと拡張し（p. 231）、国際経済における共存共栄の論理を展開している。ヨーロッパは一つの家族であり、ある部分への打撃はかならずや他の部分に及ぶ、すなわち「貿易の当事国同士の間には一国だけでは作りえない連鎖が存在する」（p. 234）として、1. 販路の相互確保の観点から一国だけが富裕ではあり

えないこと、2. 各国に固有に分け与えられた有利を交換することは相互に利益であること、3. 相対的に安価な商品を提供しあうことで相互に利益を得るが、一国がそれを独占すればその国は独占による利益以上の不利益を被ること、4. 国際金融（国際間での資金調達）の観点からも相互利益が可能であること、などをあげて「交易上の嫉妬」のナンセンスを論難している。ピントの議論は、貨幣数量の自動調節機能論やインダストリー論を踏まえたヒュームに比べれば観念的であって、むしろ「相互利益の調和的秩序」への願望の表明といった色彩が強い。この論説の後半部分は衰退が顕著なオランダの擁護に終始している。国際金融の観点は彼に独自のものだが、彼の意図は国際金融のセンターとしてのオランダの意義を強調し、その衰退に歯止めをかけることがイギリスやフランスの利益であることを指摘することにある。また彼はこのような国際的な相互依存（国際分業）の利益をお互いが享受するためには、なにより平和の維持が不可欠であることを度々力説している。この意味でこの論説の趣旨は一方で平和の効用を説くことにあった。

(13) 彼はさらにミラボー批判の矛先を彼の土地単一税論に定め、単一税の非現実性を鋭く衝きながら、単一税とは逆に奢侈性の高いものほど税率が高くなる消費税こそが流通とインダストリーを維持する上でもっとも合理的な税制であると述べている。彼には「流通の原動力により国家のあらゆる臣民によって繰り返される支出の状態が税の源泉」(p. 164)でなければならなかった。

## 2. ピントの奢侈批判

ピントは奢侈擁護論者たちと同様に「人工的必要（欲求）」の増大が「商業や製造業——それらはインダストリーと享樂の所産である——を生み出した」(p. 234)と考える。とりわけアメリカの発見が旧世界に革新的な大変化をもたらし、「新たな食料、新たな病、新たな薬、そして新たな利益がいわば情念に新たな形を与えた」とする (p. 57)<sup>(1)</sup>。このような大変化による貨幣需要の増大は、国際間での相互的な資金調達（国際金融）をその一要素とする補完的な信用システムを必然的に生み落とすに至ったこと、そして彼にはこの新たな「一般的システム」の機能は国家財政を中核とする流通とこれに導かれるインダストリーとを維持し促進すること

にかかっている事情は、既にみた通りである。ある意味でピントと文明観を共有するヒュームの議論は、しかしながら流通と信用の意義を見失っている点で、ピントにはむしろ時代錯誤にすぎなかった。このような観点から彼は奢侈的欲求をめぐる諸問題にどのように応じようとするであろうか。

彼は奢侈を擁護する人々が喧伝する奢侈の効用は一面の真実にすぎないという。奢侈は商業、流通、インダストリー、製造業を促進することで王国の繁栄をもたらし、身分の不平等を改め、嗜好の洗練と大勢の職人たちの技術や天賦の才の向上をもたらすといわれるが、「そこにメダルの良き一面がある」ことは確かであるにせよ、しかし奢侈はしばしば過度に至り、国家に大きな害悪をもたらすことも反面の真実であることを忘れてはならないという(p. 326)。彼のいう過度の奢侈とは、「大勢の人々をその能力を越えた支出へと駆り立てるような奢侈である」(p. 328)。その原因は世評が煽りたてる人間の虚栄心と自負心にある。世評は奢侈的生活に浸る人々に敬意を与え、それに無縁な人々に軽蔑を与える、こうして人は自負心や虚栄心から「自分の身分以上の敬意を熱望して」能力以上の支出を行い、破滅に至るのである。このような奢侈への熱望は拝金主義の風潮を生み、習俗の腐敗をもたらし、名誉の観念を変質させる、すなわち奢侈的生活に際立つほど名誉感が高まり、逆に質素であるほど恥辱であり世評の軽蔑の対象となる。人は恥辱と軽蔑を恐れ、世評の敬意を求めて名誉の名の下で享楽を求めるのである。こうして奢侈の結果が新たな奢侈の原因となる(p. 333)。このような顕示的消費は購買力の用途を誤らせ、その源泉を枯渇させることで、市民たちを「かれらの出自ではない卑しい境遇へと追いやってしまう」(p. 126)ことは明らかであるが、彼によればこうした個人の破滅は国家に有害である。なぜなら、このような過度の奢侈的支出は一部のインダストリーを一時的に刺激するにすぎず、その人の破滅とともにそのインダストリーも放棄されてしまうであろうし(p. 174)、また破滅した人の財産のうち貨幣は大衆の手に渡ることがありうるにしても、彼の財

産の大部分は「慣例的、人工的、人為的な財産であり…それらはその最初の所有者の破滅とともに消滅してしまう」からである。「もっとも堅固な土地財産でさえ…最初の所有者の手を離れば土地の耕作はなおざりにされてしまう」であろう (p. 330)。

マンデヴィルは名誉と恥辱こそが人を勤勞へと駆り立てる原動力であるとしたが、ピントには、それらは能力以上の支出へと導くことで「多くの市民を誤った世評の犠牲」(p. 126)にするものにほかならない。またフォルボネは虚栄心に駆られた奢侈的欲求は自己破滅にいたる放蕩や労働の軽視を招くとしてこれを批判し、マンデヴィルとは一線を画しつつも、一方で、ほかの人々と同じように豊かにみなされたいという「世評の平等」への不可能な願望こそが「国家の力と繁栄」の原因であるとしたが、ピントにとっては「将来にはかない期待を抱かせる」このような幻想は、同じく個人の破滅と国家へのダメージを招来するにすぎない。「数の増えた必要は習慣に変わり、この習慣は所有の喜びを減じつつ、喪失の落胆をかならずしも減じない。『持っているも喜びを感じないものを失うことで人はしばしば不幸になる』とは、これ以上の真実はない」(p. 329)。幻想を追い求めることはそれだけ不幸の種を大きくするにすぎないのである。ピントは「世評」に煽られ虚栄心に駆られた奢侈的欲求そのものの効用を認めない。それは、みたように能力以上の支出へと人を誘うことでその人の破滅による国家へのダメージを招くにすぎないし、そこに至らないまでも、享樂的生活はかえって勤勞意欲をそぎ、事業をおろそかにさせるし(p. 334)、そのような欲求に基づく奢侈的消費は巨額の収入を必要とするからそれだけ堅実な営業と相容れない(一獲千金を狙って「商業や交易はしばしば運任せの勝負事になる」p. 332)からである。他方で、欲求が過度であれば有用性の小さいアートほど有利となり、もっとも必要なアートがなおざりにされてしまう(p. 331)。なにより彼は購買力が個人的な快樂の追求にもっぱら向けられる結果として、公債などへの(再)投資によって維持される政府と国民との流通(循環)が断ち切られ、流通とインダストリーの全

体が損なわれることを恐れている。既にみた通りである。ほかにも彼は奢侈的な父親を模範とする子供たちはかならずや独身状態に陥り、「生命と繁殖の泉を涸らしてしまう」(pp. 331-2)こと、そもそも奢侈は「国家の偉大さと富裕の源泉である」土地の耕作と人口にともに有害であることなど伝統的な奢侈批判を展開する (p. 337)。彼は奢侈的欲求の労働のインセンティブとしての主体的機能を基本的に認めないし、またその消費需要としての客体的機能に関しても、これを積極的に称揚することはなかったのである。

このようにピントはマンデヴィル、ムロン、フォルボネ以来の奢侈容認論が前提にしてきた奢侈の効用に懐疑的であったが、しかし生活水準の向上を実現した文明の果実そのものを否定し、物理的に限定された田園生活に回帰することを主張するのではけっしてない。そのようなことは不可能であり、それは「リュクルゴスの法に立ち返り未開人を擁護する」(p. 327)に等しい。この論点が重農主義批判の論拠の一つとして敷衍されていたことは既にみた通りである。問題なのは流通を損ない秩序を転倒する奢侈的欲求あるいは「過度の奢侈」であって、「個々人の能力や身分に応じた支出や相対的な奢侈」まで否認されるわけではない。むしろ彼によれば「流通を維持するのは不断の永続的な安定した日々の支出である」(p. 125)から、このような分相応な奢侈による永続的な支出こそが永続的かつ安定した流通とインダストリーを導くのである。「もし奢侈がもっと中庸であり安楽な市民がもっと大勢いれば、たとえばリヨンで、ありふれた織物が3分の1だけ多く売られるであろう、もっと大勢の人々が織物に雇用されるであろうし…。インダストリーのほかの部門についても同様である」(p. 336)。また「流通、インダストリー、消費、商業、製造業、そして快適なアートに先立つあらゆる有用なアートを増加するのは、長期にわたり適当な持続的かつ永続的な支出を行う数多くの家計である」(p. 331)。こうして分相応な「中庸」な奢侈とは、事実上、分相応な水準を求める堅実な欲求に基づくところの大衆的消費にほかならない。しかしそれにして

も、この「中庸」な奢侈あるいは堅実な欲求に基づく大衆的消費とは具体的にどのようなものであろうか。彼は奢侈の基準は相対的なものであり、奢侈がどの段階で「政治的な悪弊」に変わるかは時と所に依りて異なることを度々了解している。したがって、まさに「進歩が無限に続くこのような漸進的な在り方のどの段階で奢侈が悪習に変わるのかを鋭く把握することが必要」(p. 327)であった<sup>(2)</sup> <sup>(3)</sup>。

以上のように彼は分相応な「中庸」な奢侈による永続的な支出を求めつつ、一方で節約の徳を称揚する。「節約 (l'économie), 儉約 (l'épargne), そして敢えてそう呼びたいが、金をため込む人間の吝嗇 (l'avarice) はけっして国家にとって損失ではない」、なぜなら「吝嗇家や節約家は金庫に貨幣をしまいこむのではない、かれらはその時代の人々および後世の人々のためにそれを流通させるのである、これによって節約家は安楽やブルジョア的な便宜のほかには奢侈を求めるともなく、商業と実直かつ容易な取引を続けうる」からである (p. 332)。ここでは節約は投資と同義であり、けっして退蔵を意味するものではないし、マンデヴィルやヴォルテールが揶揄したような貧困ゆえに強いられた「質素」と一体化したものでもない。節約家は「中庸」な持続的な消費支出を行う一方で、利得の残りを事業に投じるのである。さらに彼はいう、「節約家の商人も同じ商業において変わらず国家のために貨幣を流通させる。大きな商館で働く20人の店員は20人の従僕を維持するよりも社会に有益である。大貿易商人は商業の経営を通じて、大領主の豪奢がそうするよりも多くの人々にパンを与える」(p. 335)。彼は生産的支出と不生産的支出とを区別し、流通とインダストリーは「中庸」な持続的な消費支出とともに生産的支出によってこそ持続しうることを、そして生産的支出すなわち投資支出を可能にするのは制欲による節約であることを明らかにしたのである。ムロンは質素なスイスを隠遁者の社会に似ていると揶揄したが<sup>(4)</sup>、ピントにはスイス人のこの質素と儉約こそが土地が不毛でみるべき産業を持たないかれらの富裕の原因であった (p. 127)。

フォルボネはマンデヴィルやムロン以来の欲求の体系の構想において、奢侈の欲求の経済的機能をもっともよく発揮しうるものとして生産者大衆の「中庸」な奢侈を重視し、ピントと同じく富者による虚栄心や自負心に駆られた過度の奢侈を批判した。しかし彼は同時に過度といえども不労所得を支出する富者の奢侈的消費が停止することで相互依存（消費循環）の縮小を招くことを恐れたため、「過度の奢侈」への批判は不徹底とならざるをえなかった。これに対し、消費欲求の主導的役割に否定的なピントには、「国家の力と富とインダストリーと富裕」の原因は節度ある（分相応な）持続的な消費支出（すなわち大衆的消費）と節約による生産的支出である。だれによるものであれ「過度の奢侈」は一時的に労働と生産を刺激しうるにしても、それは一過性のものであり、富の不生産的な費消により循環を損ねるにすぎなかった（「それは明らかに木を幹から切り倒してしまうことである」）。こうしてピントはインダストリーあるいは生産を規定するのは消費支出とともに生産的支出あるいは制欲による節約（＝投資）であるという認識に立って、生産の誘因として消費欲求を一意的に強調する論理を批判したのである。ただしこの節約（＝投資）という生産の内在的条件への着目が資本理論の確立へと敷衍されていくわけではない。このことは流通論的視点に終始するピントの一つの限界を示すものである。重農主義批判を共有するフォルボネと同様に、そこから資本理論の可能性を読み取ることはなかったのである。道徳的観点を持ち出しつつ奢侈を批判するピントの態度は、伝統的な奢侈批判を復活させる側面を持つが、しかしみてきたように、彼の基本的スタンスは生活水準の向上を実現した文明の果実をよりよく保証しうる条件を（流通論的視点から）究明しようとするものであり、それはまた「奢侈は必要かつ避けられない悪となったから、できるだけそれを利用しなければならない」（p. 287）とする現実主義に裏付けられてもいた。ここでは質素、節約の伝統的モラルは不十分ながら新たな経済学的意味を与えられ、これによりピントは奢侈論争の重要な転回の局面にささやかな一足跡を印すこととなったのである。



(註) (1) アメリカの発見は習俗を悪化させたが、一方でこれを契機として「商業、植民地、海運、航海、新発見への意欲が普遍的なシステムとなった。アートと諸科学の教養が商業の意欲に結び付き、ヨーロッパの礼節に新たな輝きを加えた。財産を築く容易さが一種の自由と平等を確立し、それはさまざまな身分の者を近づけ、貧民全体がきわめて少数の金持ちに対して陥れられていたように思える隷属と墮落を消滅させた。これがおそらくアメリカの発見がヨーロッパにもたらした最大の善である」(pp. 57-8)。

(2) 彼はほかの箇所でも「金銭的な能力や世の中での地位に応じて各市民に許されるべき堅実な支出を奢侈取締法によって抑圧せずに、過度の奢侈を妨げる妥協的な方法を見出すことが立法の偉大なる真髄であろう」(p. 174)と述べているが、その「方法」については、合法的に自己の財産を増やした者には「功績勲章」を与えて虚栄心を満足させ、それがくだらない華美に向かわないようにすることなどをわずかにあげるにすぎない。さらに彼は零落した者への融資制度を設けて合法的に立ち直れる機会を与えることを提唱している(p. 340)。

(3) 彼は分相応な支出を求める理由を政治的観点からも説いている。すなわち分不相応な奢侈を望む大衆の消費欲求の肥大は、社会的ヒエラルキーを損ない「政治的調和」を損なう。「どのような国民であれ、数々の階層に分割されねばならないと私には思える。さらに社会の各階層には相互に釣合の取れた一定の数がいなければならない、すなわち下層の人々がより多くいなければならない、そうでないと政治的調和が損なわれる」(p. 256)。もっとも彼は下層の人々が低い生活水準に固定されるべきだとは考えない。大勢の裕福な臣民による大規模な消費とインダストリーこそが政治的な力の源泉だからである(p. 258)。大衆的消費への着目によって、マンデヴィルなどにみられる伝統的な固定観念から抜け出ている。いずれにせよ、ピントにとって国民的富裕の増進はこのヒエラルキーを維持しつつ漸進的に行われねばならない。

(4) Jean François Melon, *Essai Politique sur le Commerce*, 1736, pp. 111-2.

### 3. 結びに代えて——奢侈と節約

最後にこの転回の意味を簡単に整理しておきたい。

マンデヴィルは貪欲（獲得欲，所有欲）は放蕩や浪費（消費欲）と一見対立してみえるが，消費を前提にした獲得欲や所有欲の発揮であるかぎり，「強欲は放蕩の奴隷」であり，両者は矛盾しないと考えた（したがって貨幣をため込むだけの吝嗇は有害である）。このように貪欲を浪費と結合する一方で，これを制欲の結果である節約とは峻別する。彼にとって節約は貧困の別名であり，「国民の窮乏なくして国民の節約は絶対になかったし，また今後もないであろう」<sup>(1)</sup>。質素と節約のモラルは欲求の体系としての文明社会の原理と根本的に相容れないからである。これとはまったく異なる観点から節約のモラルと論理を説いたのが『政治論集』（1752年）のヒュームである<sup>(2)</sup>。

ヒュームもマンデヴィルやムロンにみられた欲求の解放の論理を文明化論の機軸に置いている。アートとインダストリーの展開を導く農産物余剰の増大は，農業者の消費欲求を満たしうる消費財の提供によってかれらの生産意欲が刺激されてはじめて可能である。「労働の唯一の原因はわれわれの諸欲望」(p. 11/11)であり，「祖先が享有したよりもすばらしい生活状態を持つという欲望」(p. 14/14)がインダストリーの原動力である。したがって「生活上の装飾と快樂とに役立つすべての財貨の増加と消費とは社会に有益である。…このようなぜいたく品にたいする欲求のない国民においては，人々は安逸にながれ，生活享樂品のすべてをもたなくなり，国家の役に立たない」(pp. 23-4/23)。このように消費欲求の主体的機能が強調されるが，反面でその消費需要としての客体的機能への着目はほとんどみられない。わずかに，「土地の所有者やそこで働く労働者の間に見出される欲望と必要が少なければ少ないほど，かれらが働かせる人手も少なくなることは確かである」(p. 6/6)と述べられているばかりである。したがって，インダストリーの展開が消費欲求の客体的機能に導かれて実現されていく側面はヒュームの視野から脱落し，「奢侈」はもっぱら「インダストリー→アートに必然的に内在する，その展開の心理的誘因」<sup>(3)</sup>として捉えられるにとどまっている。奢侈論と消費論を結合し，分業と交換の相互依存

のシステムを消費循環として捉える着想は示されなかったのである。

さらに利子を論じた論説では、節約のモラルの前に、奢侈的欲求の充足それ自体が自己抑制を求められる。消費欲求はインダストリーの展開を主体的に導いていくとはいえ、一方で「人間はもともと、労働よりも安逸を好み、遊んで暮らしてゆけるものならすすんで苦勞しようとしなさい」(W・テンプル) から、人々のインダストリーへの精勵を持続させるためには「かれに心身を用いる(快樂よりも)もっと無害な方法を教える」必要があるとされる。勤勞の行使から生じる利得の蓄積がそれである。「勤勞の行使にはどんな種類のものにも利益が付与されるならば、かれはきわめてしばしば利得を眼中におくわけであり、こうして次第に利得にたいする欲望を獲得し、自分の財産が日毎に殖えてゆくのを見る快樂にまさる快樂を知らぬようになる」(p. 53/55)。利得の費消による消費欲求の充足よりも、利得の蓄積それ自体が最上の快樂であり、利得はもっぱら蓄財への意欲あるいは獲得欲の發揮へと人を駆り立てる。こうして、いわば制欲こそ最大の快樂であるという逆説が生じるが、ヒュームはこの逆説を「必然の結果」であるという。「商業は人々に仕事を与えかれらを利得のあるわざに用いることにより、節約を増大させる。そしてこのわざは、間もなく人々の愛着心をひきつけ、快樂と出費とにたいするすべての好みを取り除く。節約を生み出し、利得の愛好を快樂の愛好よりも強くするのは、すべての勤勉な職業の必然の結果である」(*ibid.*)。彼がここで「必然の結果」とするものは、明らかに労働観におけるヒューム的転回・飛躍の反映にほかならない。この転回・飛躍の内的論理を『政治論集』に十分に窺うことはできないが、いずれにせよここでは利得の節約は勤勉のモラルに必然的に伴う一つのモラルとしてそれと一体化され(ただし節約の主体はその能力の点で事実上、商人にのみ求められている)、インダストリー論の前提をなしている。彼は勤勉とは無縁の有閑者による浪費を非難する一方で、勤勞者の勤勉による利得を直接的な費消の対象としてではなく蓄積の対象とみることで、労働意欲の源泉を蓄積への意欲あるいは獲得欲に求めたのであ

る。節約のモラルと結合したこの勤勉のモラルにおいては「快樂と出費とにたいするあらゆる好み」は取り除かれるから、この局面ではインダストリーの原動力としての（奢侈的）消費欲求の主体的意義は大きく後景に退くことになる<sup>(4)</sup>。

こうしてマンデヴィルやムロンの社会像とは異質な社会像が立ち現われる。ヒュームの奢侈論の影響を受けながら、しかし奢侈論と消費論を結合しつつ、（奢侈的）消費欲求の主体的かつ客体的な経済的機能を一般化することで「相互的欲求」の体系としての商業社会の一本質を見事に捉えたフォルボネとの違いもここにある。このようにヒュームにおける節約のモラルと論理は奢侈論争に重要な転回を印すものであったが、しかしながらヒュームはこれをおもに人々の労働意欲の原因として説いたのであって、それを経済学のレベルにおいて十分に深めるには至らなかった。「生産における主要な媒介者」としての商人たちが節約により勤労を増大しうるとされているのみであり、わずかに節約はすなわち退蔵ではなく投資であるとする旧来の観念が示唆されているにすぎない。この意味で、ピントは生産的支出と不生産的支出とを区別し、節約を生産的支出（投資支出）の条件として位置付けることで、不十分ながら節約の論理に経済学的な彫琢を加えたといえよう。しかもピントは節約・生産の論理を一面的に強調することはない。流通とインダストリーは、一方で「中庸」な持続的な消費支出（事実上は大衆的消費）によって維持されると考えたからである。流通（循環）論的視点に立つピントは、生産の誘因としての持続的な消費支出の意義を見失うことなく、節約による生産的支出という生産の内在的条件に着目したのである。

このような奢侈論争の転回は経済学の形成において新たな道筋を開くものであった。新たな経済学的な意味を与えられた節約の論理は、ケネー以来の資本理論と結合してテュルゴやスミスの経済学に結実すること、とりわけスミスにおいて資本利潤の節約（蓄積）による生産力の自己増殖という販路説的展望が生み出されること、これとともに消費循環の視点は見失

われてしまうことは知られる通りである<sup>(6)</sup>。また一方で、みてきたようにこの転回はおのずから社会像の転換を伴うものであった。こうして、奢侈か節約かという問題は消費か生産かという経済学上の問題を提起するばかりか、それと密接に呼応しつつ、商業社会（近代社会）の本質はなにか、それを動かす人々のエトスはなにかという旧知のより根本的な問題を問いかけてもいるのである。

(注) (1) *Bernard Mandeville, The Fable of the Bees : or, Private Vices, Publick Benefits*, ed. by F. B. Kaye, 2 vols., 1924, vol. 1, p. 251 (泉谷治訳『蜂の寓話 私悪すなわち公益』法政大学出版局, 1985年, 230ページ)。

(2) 『政治論集』からの以下の引用ページは, *David Hume, Writing on Economics*, ed. by E. Rotwin, 1970 と田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』(お茶の水書房, 1983年)からのものである。

(3) 小林昇「『原理』における奢侈について」『小林昇経済学史著作集——J・スチュアート研究——』(未来社, 1977年), 248ページ。

(4) 竹本洋氏はここにヒュームの「文明社会像の変質」を, すなわち「蓄積を基調とする新たな文明社会像」への転回をみている(竹本, 前掲論文, 77ページ)。また竹本氏はヒュームにおける「節約は将来のより大きな快楽の享受を目的とするものではなく, 快楽の無限の先送り——事実上は快楽の放棄——」であると述べている。そうだとすれば, 境遇の改善への意欲が持つ主体的意義は後景に退くどころか, 事実上, 消滅してしまうであろう。

(5) ケネーやボードー以来の資本理論を彫琢したテュルゴにとって, 資本の総額を増大するのは「国民の節約の精神」であって, 奢侈は資本を破壊する不生産的な浪費にすぎない(テュルゴ『富の形成と分配に関する諸考察』1766年の第80節「節約の精神」)。またスミスは濫費すなわち「目前のものを享受したいという情念」を抑制し, 将来のより大なる消費欲求の充足のために当面, 財産の蓄積すなわち節約に励むことはむしろ大部分の人には濫費にまさる本能であるとする。こうして境遇の改善を求めることはスミスにとっては節約(蓄積)と同義であり, 消費水準の向上を求める消費欲求の主体は, 当面の奢侈的欲求を抑制し将来のために蓄積に励む節約の主体に転化する。この節約こそがスミスの経済学体系の礎石であったことはいうまでもない。彼は節約の論理を価格理論と結合し, 価格に組み込まれた資本利潤の節約(蓄積)による生産力の自己増殖という販路説的展望を導いた(スミス『国富論』第2編第3章)。

ヒュームは節約を「快樂と出費とにたいするあらゆる好み」を取り除くものと考えたが、スミスにとっては節約はより大なる快樂のために目前の快樂を先送りすることにすぎず、この意味で境遇の改善を求める消費欲求の主体的意義が失われるわけではない。しかし反面でこの販路説的展望は有閑階級や勤労大衆の消費主体の側面における客体的意義（生産の誘因としての有効需要の視点）を見失わせることになった。たとえば、スミスの高賃金論が有効需要の視点を欠いており、その意味でデフォー以来の高賃金の論理からは断絶を示していることは指摘されている通りである（小林昇「アダム・スミスにおける賃金」『小林昇経済学史著作集Ⅱ』未来社、1976年を参照）。